

本書について

本書は張吉主編『経脈病候弁証与針灸論治』（人民衛生出版社，2006年刊）を底本として翻訳したものである。

本書は十二経脈と奇経八脈の病候を系統的かつ完全に網羅し，それらを以下の4項目にまとめている。

- ①本経が内循する本臓（腑）の病候
- ②本経が外循する肢体や体表部分の病候
- ③本経と関連のある臓腑・組織・器官の病候
- ④本経の経筋・絡脈の病候

これらをベースに，さらに虚実寒熱の四綱弁証を加えることで，取経論治の治療原則と取穴法則および必要な手技を確立し，より完全で系統的な鍼灸の弁証論治を目指している。

本書では各内容ごとにわかりやすく主題を述べ，難解な内容に関してもできるだけ平易で理解しやすい表現を用いている。中医学の研究者および臨床従事者の学習に最適の書である。

本書の読み方

本書には総論がなく，各論のみの構成となっている。著者・張吉氏のまえがきに総論に相当する内容が含まれているため，本篇を読む前にまえがきをご一読いただきたい。

経脈の循行および身体部位に関する表記について

本文中，経脈の循行を記載した部分における「内」「外」「前」「後」などの表現は、『靈枢』などの古典記載にもとづく記述であり，解剖学

的姿勢とは必ずしも一致しない。

解剖学的姿勢において肘関節は屈曲せず手掌面は前方を向くが、古典記載において（特に上肢に関して）は固定した姿勢がなく、「前」「後」「内」「外」といった位置関係の記載については経脈の循行や経穴の位置などを根拠に判断する必要がある。

本書においては、現代文で循行を記述している部分も古典記載に倣った「前」「後」「内」「外」の表現を用いているため、特に上肢に関しては解剖学的姿勢とは一致しないことに注意が必要である。

付録について

付録1「十四経脈の循行についての考察」は、原書の「附録 十四経循行考」を翻訳したものである。付録2「用語解説」は、訳者による用語解説で、解説が必要と思われる単語に＊を付け（各節初出時にはルビを付している）、巻末にまとめたものである。付録3「文献一覧」は、本書で引用されている文献等について訳者がまとめたものである。

「付録1 十四経脈の循行についての考察」について

「付録1 十四経脈の循行についての考察」については、原書において特に内容についての説明がないため、見出しを説明的にすることで補足を行っている。

「諸書との比較検証」の項目においては『靈枢』と諸書（古典文献15部）との違いが比較されているが、原書で指摘されている箇所以外にも『靈枢』と諸書との原文の不一致はみられる。

本文中（ ）で表記しているものは原文注であり，〔 〕で表記しているものおよび肩付数字を付けて別欄に注を設けているものは訳者注である。